コロナ禍での保育

神奈川県保育会（五反田保育園園長）　伊澤　昭治

未知の感染症コロナウイルスが蔓延して２年半が経ちました。保育現場ではこの間感染症拡大防止に努め、保育園の開所を行いながら保育の継続を行ってまいりました。

当初は何をどうすれば良いのか分からず国や地方自治体からの情報を共有し手探りで感染予防に努めました。手洗いとマスクの着用、三密を避け会話を控え、食事も黙食とパーテションの設置と感染予防情報はあるものの、乳幼児の現場である保育園ではそもそも三密を回避する事は不可能であり、マスクの着用も限界がありました。そして一人の陽性者が判明すると臨時休園処置と園内消毒を行い、2 日間に遡って全園児の行動履歴を確認し、濃厚接触者の選定を行い、自宅健康観察期間を要請しました。各ご家庭も苦慮された事とは思いますが、保育現場も初期対応に追われ、それ以上に現場職員は自身感染の有無や家族感染の不安とストレスが高い日々が続きました。

その後、エッセンシャルワーカーとしての自宅待機期間の縮小もありましたが、抗原検査キットや PCR 検査キットの不足から迅速な対応が取れない事もありました。

またこの間、保育内容も各園で見直しが行われました。毎月の誕生会や全園児での行事は規模縮小や中止となり、運動会や発表会など保護者参加行事はクラス単位での開催や参加人数の制限、オンライン配信を行うなど見直しがなされました。毎日の送迎も玄関先での受け渡しとした園もありました。

今年に入り、コロナ感染症も収束の兆しが見えましたが変異株の出現等で再燃を繰り返しています。幸い子ども達はいつも元気に過ごし、環境の変化にも順応してくれています。先日、０歳児クラスでこんな事がありました。いつも見慣れたマスク姿の保育士が、マスクを外した途端、赤ちゃんが泣き出したというのです。確かにマスク姿が日常となった中で、顔の一部でその人を認識する際、自分の好みで顔全体をイメージすると聞きます。

きっと赤ちゃんも自分の想像した保育士像と違いがあったのかも知れませんね。

１日も早くマスク無しでの生活が戻ることを願っています。

2022.7 月　執筆